

埼玉県羽生市におけるニホンアカガエルの記録

荒井康充（さいたま水族館）・佐藤日向（さいたま市大宮北中学校）

はじめに

ニホンアカガエル *Rana japonica* Boulenger, 1879は無尾目アカガエル科アカガエル属に分類され、本州、四国、九州、隠岐および大隈諸島に分布している（日本爬虫両棲類学会, 2021）。平地や丘陵地に多く見られる日本固有種で、12月から4月ごろに水田や水溜まりなどに産卵し、500~3,000個の卵を含む球を圧平したような卵塊を産むことが知られている（日本爬虫両棲類学会, 2021）。埼玉県においては、台地や丘陵地から低地帯にかけて広く生息しているが、耕作放棄等による湿地の減少、開発により個体数、生息地が減少している（埼玉県, 2018）。また、アライグマによる捕食も確認されており、個体数減少の原因が多岐にわたっている（埼玉県, 2018）。埼玉県東部における過去の記録では、羽生市（羽生市史編集委員会, 1971）、加須市（加須市史編さん室, 1981）、蓮田市（社会教育課市史編さん室, 2004）、草加市（草加市史編さん委員会, 1997）、春日部市（環境経済部環境政策課, online）などに記録がある。しかし、2024年に加須市で行われた調査では、本種は確認されておらず（Yasuno, 2025）、羽生市近郊では近年記録されていない。

本稿では、2025年4~6月にかけて行った埼玉県羽生市の利根川河川敷での調査において確認された、ニホンアカガエルの成体および卵塊の記録を報告する。

ニホンアカガエルの記録

2025年4月8日の日中から夜間にかけて、埼玉県羽生市の利根川本流河川敷に形成された小水域（図1）でニホンアカガエルの成体2個体とカエル類の卵塊を確認した。

成体の同定には「新日本両生爬虫類図鑑」（日本爬虫両棲類学会, 2021）を用いた。その結果、背部の2本の縦筋が直線であること、体色が赤褐色から茶色であること、前脚の指に婚姻瘤があることから成熟したニホン

アカガエルの雄であると同定した（図2）。

一方、同所で確認された卵塊は、球を圧平した形状で、卵径は1.3~2.0 mmの範囲内であること（松井・関, 2008）、表面に粘性があり、泥が付着しても落ちにくい特徴を示した（広瀬・富岡, 1974）。これらの特徴から、ニホンアカガエルの卵塊であると同定した。卵塊は計5個確認し、いずれも小水域の浅瀬に産卵されていた（図3）。

河川敷内は車両の通行によりできた大きな轍が多数あり、降雨や利根川本流の増水時に水が流入することにより形成される小水域である。卵塊を確認した小水域は大きなもので幅約2.6 m、長さ約4.6 m、水深は最も深い場所で約25 cm、泥で濁った水で満たされていた。

同年4月11日夜間、多数の幼生が卵塊周辺を遊泳している様子を確認した。外鰓が確認できることから、ふ化直後の幼生であると考えられる（図4）。

同年4月19日日中、同水域付近において全長約23 mmの幼生を確認したため、撮影、同定を行った。同定には「カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック」（松井・関, 2008）を用い、胴部背面に1対の黒褐色の点状斑紋があること、尾は中程度の長さで口器が小さいことなどからニホンアカガエルの幼生であると同定した（図5）。

同年6月1日日中、四肢の生えた幼生を多数確認した。上陸直前の段階であると判断される（図6）。

調査期間中は雌個体や雄の鳴き声、産卵行動は確認されなかった。

同年12月4日現在、卵塊を確認した地点では小水域は確認されなかった。轍のみが残っている状態であることから不安定な水域であると考えられる。



図 1. 利根川本流河川敷に形成された小水域
(2025年 4 月 8 日、荒井撮影)



図 4. 卵塊周辺で確認されたふ化直後の幼生
(2025年 4 月 11 日、荒井撮影)



図 2. ニホンアカガエルの雄個体
(2025年 4 月 8 日、荒井撮影)



図 5. ニホンアカガエルの幼生
スケールバーは10 mm。(2025年 4 月 19 日、佐藤撮影)

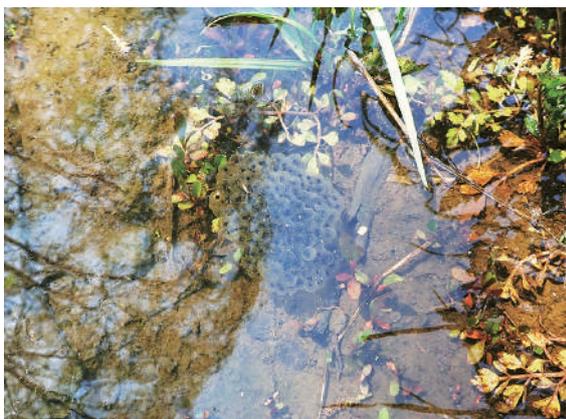


図 3. 小水域の浅所に産み付けられたニホンアカガエルの卵塊
(2025年 4 月 8 日、佐藤撮影)



図 6. 四肢の生えた幼生
(2025年 6 月 1 日、佐藤撮影)

考 察

羽生市における本種の直近の記録は1971年（羽生市史編集委員会, 1971）であり、以降、報告例がない。そのため、今回の記録は以下の3つの可能性が示唆された。

① 小規模な個体群が局所的に残存していた可能性

確認地点は利根川河川敷の車両轍に形成された一時的な水域であり、民家から離れていること、交通量が少ないことなどからこれまで発見に至らなかった可能性がある。

本種は、適した産卵場所を探して移動もするため、河川敷のワンドのような不安定かつ一時的な水域であってもよく利用する。したがって、産卵場所の消失が生じても、近隣に適した代替地があればそれらを利用して繁殖を継続することがある。

② 利根川本流の増水等に伴い上流部や周辺地域から個体が流れ着き繁殖した可能性

当地対岸の群馬県においては利根川本流周辺の古い記録として板倉町、大泉町、伊勢崎市がある（富岡, 2000）。群馬県レッドデータブック2022では、開発や管理放棄により生息環境が悪化しているものの、群馬県全域で生息が確認されており（群馬県環境森林部自然環境課, 2022）、現在も生息が確認されていることから、当地へ個体流れつき、繁殖した可能性があると考えられる（図7）。

③ 人為的または意図しない活動による他地域から移入の可能性

周辺では氾濫区域堤防強化対策が実施されており（国土交通省, online）、工事車両の往来が多かったことから、人為的、非意図的に他地域の個体が移入された可能性も否定できない。

近年、埼玉県内において本種は台地、丘陵地帯から低地帯にかけて広く生息しているものの、湿田の減少や開発、アライグマによる捕食など様々な要因で個体数が減少している（埼玉県, 2018）。羽生市における本種の記録は1971年（羽生市史編集委員会, 1971）を最後に報告がされていないことから、当地を保全することで希少な個体群を維持することが出来る可能性がある。引き続き当地ならびに周辺の調査を継続し、今後の動向に注視していく必要がある。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、環境科学国際センターの安野 翔氏には文献の提供をいただいた。埼玉県立川の博物館の藤田宏之氏には本稿についてのご助言や校閲をしていただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

引用文献

群馬県環境森林部自然環境課（2022）群馬県の絶滅のおそれのある野生生物（群馬県レッドデータブック）動物編 2022年改訂版。



図7. 調査地点と過去にニホンアカガエルが確認された地点。

- : 調査地点（埼玉県羽生市）
- ▲ : 群馬県の利根川本流周辺で報告されたニホンアカガエルの古い記録（富岡, 2000）
- : 埼玉県東部で報告されたニホンアカガエルの過去の記録（羽生市史編集委員会, 1971；加須市史編さん室, 1981；社会教育課市史編さん室, 2004；草加市史編さん委員会, 1997；環境経済部環境政策課, online）

- 羽生市史編集委員会 (1971) 羽生市史 上巻. pp. 23-33. 山陽印刷有限会社.
- 広瀬文男, 富岡克寛 (1974) ニホンアカガエルとヤマアカガエルの卵塊の比較. 遺伝 28 : 108-111.
- 環境経済部環境政策課 (online) 第2次春日部市環境基本計画. <https://www.city.kasukabe.lg.jp/material/files/group/31/dai2syoun.pdf>. (2025年12月11日閲覧).
- 加須市史編さん室 (1981) 加須市史 通史編. pp. 27-44. ぎょうせい.
- 国土交通省 関東地方整備局 (online) 令和7年度利根川上流河川事務所 主要事業～利根川の洪水氾濫を未然に防ぐため、堤防や調節池の整備等を推進します～. プレスリリース. https://www.ktr.mlit.go.jp/kisha/kisha_02266.pdf. (2025年12月4日閲覧).
- 日本爬虫両棲類学会 (2021) 新日本両生爬虫類図鑑. pp. 66-67. サンライズ出版.
- 松井正文, 関慎太郎 (2008) カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック. p. 30. 文一総合出版.
- 埼玉県 (2018) 埼玉県レッドデータブック動物編 2018 (第4版). 埼玉県環境部みどり自然課.
- 社会教育課市史編さん係 (2004) 蓮田市史 通史編Ⅱ. p. 541. 秀飯舎.
- 草加市史編さん委員会 (1997) 草加市史 通史編 上巻. p. 109. 第一法規出版.
- 富岡克寛 (2000) 関東平野北部の谷津田におけるアカガエル2種の産卵時期と卵塊数の長期動態. 千葉中央自然誌研究報告特別号 3 : 9-16.
- Yasuno N. (2025) Responses of aquatic biodiversity to irrigation timing and double-cropping regimes in rice paddies. *Ecological Indicators* 181: 114432.